

# 三大暴れ川の仲間を紹介します 第4回

## 九州北部豪雨災害の状況と復興へむけて

## 筑紫次郎・筑後川

### ◆記録的な大雨

平成29年7月5日、数十年に一度の降雨量となる大雨が予想される場合に発表される大雨特別警報も出されました。1時間降水量が129.5mm、24時間降水量が545.5mmに達し、観測史上一位の値を更新する記録的な大雨だったのです。この豪雨は九州北部地方（朝倉市・東峰村・日田市など）に甚大な被害をもたらしました。

朝倉市の場合、人的被害は、死者32名、行方不明者2名。住家被害は、1,452件、その他の被害も1,040件、農林水産被害12,337件にものぼります。



流木が突き刺さった家屋

### ◆災害の特徴は…

今回の災害の特徴は、筑後川本流の災害は少なく、本流に流れ込む中小河川で起こりました。被害の最も多かった朝倉市杷木地域には、赤谷川、白木谷川、寒水川、北川の4支川があります。4支川とも土砂や流木が一気に下流へ押し寄せ、それぞれの谷川にある集落は濁流にのまれて土石と流木が堆積し、地形が全く変わってしまいました。



土砂に埋もれた家屋



濁流に挟り取られた家屋

### ◆大きな被害の原因は…

記録的豪雨であったことが大きな原因です。植林された山林は風化花崗岩（真砂土）や変成岩の風化土の地質で表層崩壊（土砂崩れ）が起きやすかったのです。また、人工林の根が浅いことも大量の流木の原因になりました。大量の流木と土砂が架橋にたまり川をせき止め被害が拡大しました。急激に押し寄せてきた濁流に、谷底平野にある集落は逃げ場を失ったことが人的被害を大きくした原因だと思われます。



流木の山がいたる所にみられる

### ◆いま、被災地域では…

「日常の生活をどう取り戻すか。田畑・果樹園も失った、どう生活するのか。住み慣れた地域をどうするのか。大雨のたびに怯えなければならない、崩壊した山をどう再生させるのか」などの課題をかかえながら復旧・復興へ向けての取り組みをしています。復興にあたって被災地住民の声を反映させて欲しいと住民会議を持ち知恵を出し合っています。多くの人々の声援に元気をもらい多くの人々の協力や支援に感謝しつつ「まけんばい」と頑張っています。



復旧作業が少しずつ進む



復興へ向けての住民会議

## 利根川流域のアウトライン

## 坂東太郎・利根川

利根川とその流域に関する詳しい情報は、利根川を管理する国土交通省の利根川上流と下流の其々の河川事務所のウェブサイトで紹介されています。この情報を引用して利根川とその流域のアウトラインを見てみましょう。

### ◆流域の広さ

16,840km<sup>2</sup>。この流域面積は、日本一です。国土の4.5%を占めますが、この中に、国の総人口の約1/10に当たる約1,279万人（平成17年値）もの多くの人々が暮らしています。群馬、栃木、茨城、埼玉、千葉、東京の1都5県に跨り、その中に153の市区町村（平成24年値）が在ります。埼玉県が4つ程入る広大さです。この広さは、地形的な纏まりですが、利根川の水は荒川や多摩川と連携して首都圏の水需要を支えるシステムで活用されていることから、荒川・多摩川流域、房総半島南端まで含むさらに広い“利根川流域圏”が存在します。

### ◆川の長さ

322km。この長さは、長野県と新潟県を流れる信濃川に次いで国内で2番目です。上越新幹線の東京－新潟間の距離に相当します。

### ◆利根川の源流と河口

利根川の源流は、本州の背骨にあたる三国山地の標高1,831mの大水上山の三角形の雪渓です。急峻な山間に源があるため、長い間源流の位置が特定できませんでした。ようやく昭和29年（1945）に確認されました。大水上山から流れ出た利根川の水は、関東平野を北西から南東に300km以上を旅して千葉県銚子市で太平洋に注いでいます。



出典：国土交通省 関東地方整備局 利根川ダム統合管理事務所

### ◆利根川の水系

利根川の代表的な支川として西から渡良瀬川（長さ約107km）、鬼怒川（約176km）、小貝川（約112km）が在ります。そして、大小800以上の支川が利根川流域を流れています。

### 【訂正とお詫び】

35号P5の利根川紹介記事において、長瀬（ながとろ）川のルビを、編集部が誤って表記してしました。訂正いたしますとともに、深くお詫び申し上げます。